# 埼玉県寄居町における双頭ニホンマムシの記録

藤田宏之（川の博物館）、高木　優（一般財団法人日本蛇族学術研究所）

## はじめに

ニホンマムシ *Gloydius blomhoffii* はクサリヘビ科マムシ属のヘビ類で、北海道・本州・四国・九州やその周辺の島嶼に生息している（日本爬虫両棲類学会，2021）。埼玉県では都市化の進行した県南部における記録が少ないが、丘陵地や低山を中心に広域に分布している。大里郡寄居町の一級河川荒川の河川敷に立地する川の博物館周辺では、河川敷や林縁部などで確認されているが（藤田・石井，2011）、同町赤浜地区において大変珍しいニホンマムシの双頭の個体（以下、同個体と記す）が確認された。同個体は産地が伏せられた上で展示され新聞報道等で話題になったが、寄居町や埼玉県のみならず日本国内においても貴重な記録であるため、ここに記す。

## 双頭ニホンマムシの確認事例

2023年10月29日埼玉県大里郡寄居町赤浜（図１）において、落合直通氏が畑に積まれていた竹材の間から双頭のニホンマムシを発見した。同個体は衰弱している様子であった。体サイズは全長15㎝であり、当年生まれの幼体と考えられる（図２～４）。

同個体が確認された地点は、一級河川荒川右岸河川敷付近で、川の博物館より約２㎞下流である。付近は畑、スギ人工林（地図記号では広葉樹林）、造成した工業用地が混在した河岸段丘上の傾斜地である。

また、ニホンマムシは動物愛護管理法で特定動物の指定種であり、同個体は飼養許可を得ている一般財団法人日本蛇族学術研究所が収容した。なお、同個体は衰弱からやや回復の様子もみられたことから、日本蛇族学術研究所が運営するジャパンスネークセンター（群馬県太田市）で、2023年11月３日から６日までの４日間、一般公開で生体展示された（上毛新聞社 _1，2023）。

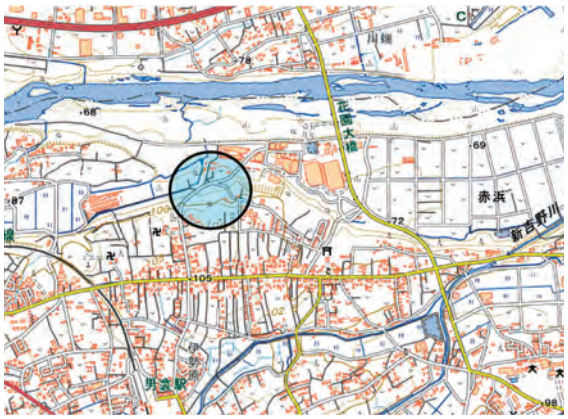


図１　双頭ニホンマムシが確認された地点周辺
（地理院地図（電子国土 Web）を使用）

一般公開前の11月２日、餌への興味関心を探るため、少量の給餌（外来起源の北海道産冷凍トノサマガエルの脚）をした。一般公開終了後の11月８日には２回目の給餌（冷凍トノサマガエル幼体）をおこなった。しかし、残念ながら翌11月９日に死亡した。死後同個体は、11月10日に専門機関において死亡解剖ならびに MRI 検査を実施した後、剥製ならびに骨格標本として日本蛇族学術研究所が収蔵保管している。

## 考　　察

同個体はその珍しさから地方新聞の記事（上毛新聞社 _2，2023）や SNS などで話題を集め、公開展示会場のジャパンスネークセンターにはわずか４日の公開期間に約3,000人の来場者があった。また、偶然と考えるが、2024年５月４日に福岡県北九州市でも同個体と類似した双頭のニホンマムシが見つかり、テレビや web メディアで報道されている（RKB 毎日放送，テレビ西日本，2024）。何かと嫌われもののヘビであるが、世間の話題になったことがうかがえる。珍しいヘビは「珍蛇」と称することがあるが、一目見ようと一般公開展示に多くの来場者が押しかけたといっても過言ではない。

ニホンマムシ双頭ヘビの記録に関しては、古くは Nakamura（1938）によって紹介されている。さらに Nakamura（1938）では、ヘビ類のナミヘビ科のジムグリ、ヤマカガシ、ヒバカリの双頭ヘビについて紹介されている。また、埼玉県寄居町では、2005年６月にアオダイショウの双頭ヘビが発見され、小さな記事ながらも全国版の社会面で掲載された（朝日新聞東京本社，2005）。

今回の同個体が確認された地点の周辺は（図１）、過去にもニホンマムシの確認記録がある。筆者のひとりである藤田は2019年８月

15日および2022年７月13日の２回確認している。しかし、特に情報収集や調査はしていない上に、２回の記録は道路上で、退勤時の夜間に通りかかった際の記録である。河川敷、斜面林、畑が存在する環境は、隠れ場所や餌資源も整っているため、潜在的なニホンマムシの個体数は少なくないことが推測される。また、それなりに人の手が入り、人の目もある程度ある人為的な環境でありながら、ニホンマムシにとっては生息に適した条件下であり、今回の発見につながったと考えられる。

図２　双頭ニホンマムシ全身

図３　双頭ニホンマムシ頭部

図４　通常のニホンマムシ幼体との体サイズ比較

図５　双頭ニホンマムシの給餌の様子
※図２～5は日本蛇族学術研究所撮影

## 謝　　辞

個体の提供や当時の状況の聞き取りにご協力いただいた落合直通氏、文献をご提供いただいた一般財団法人日本蛇族学術研究所の森口　一氏に感謝申し上げる。

## 引用文献

朝日新聞東京本社（2005）青鉛筆（コーナータイトル）．朝日新聞　平成17年６月18日付朝刊14版，39（社会）．

藤田宏之，石井克彦（2011）埼玉県立川の博物館周辺の爬虫類相．埼玉県立川の博物館紀要 11：1-4.

上毛新聞社_1（2023）上毛新聞　令和５年11月５日付．14（地域）．

上毛新聞社_2（2023）上毛新聞　令和５年11月26日付．20（社会）．

Nakamura, K (1938) Studies on some specimens of double monsters of snakes and tortoises. Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University. Ser. B 14: 171-191.

日本爬虫両棲類学会〔編〕（2021）ニホンマムシ．新日本両生爬虫類図鑑．pp. 195-196. サンライズ出版．

RKB 毎日放送（2024）見つかった双頭のヘビはニホンマムシ　生後半年ほどの子供か　夏ごろ一般公開の予定．2024年５月８日付 web サイト．https://newsdig.tbs.co.jp/articles/rkb/1157580?display=1（2025年１月７日閲覧）

テレビ西日本（2024）頭が二つあるヘビ　北九州市の山でキャンプ中の男性が見つける　近くの博物館で保管．2024年５月７日付 web サイト．https://news.tnc.co.jp/news/articles/NID2024050721161（2025年１月22日閲覧）